次世代からのESD体験報告会

次世代を担うみなさんに「皆さんが参加体験している（していた）ESDプログラムがもっと広がっていくためには何が大切で、何が必要だと思いますか？」という問いへ答えていただきました。

1. 那智勝浦町立市野々小学校

私たちが伝統や文化について学び、学んだことを次の世代へと伝えていくこと、情報を発信していくことが大事。

2. アイキッズ～エコアイディアキッズびわ湖～

環境を守っていくには、その環境を好きになることが一番大事。自分はESDの活動を通じて住んでいる町がもっと好きになった。

3. 日能研

「他者を理解する ＋ 助け合う気持ちを大切にする」という考え方を世界中の人が持つこと。自分も持ち続けたいし、大人にも持ってほしい。

4. ESDあいち・なごや子ども会議（豊田市立藤岡南中学校）

いろいろな人や物と関わる。一人よりたくさんの人のつながりを広げていくことで、昨日できなかったことが今日可能になることを活動を通じて学んだ。これを広げていけばいつか世界が変わる日が来る。

5. 五井平和財団

ESDの活動をしていく上で子どもにはできないことがある。そこを大人に協力してもらって実現していくことで、世界の持続可能性につながると思う。

6. 多摩＆岡山ユネスコスクール

自分達の活動について地域の人、学校内へももっと発表していく。興味・関心を持つことで、活動が広がる。さらに世界の人たちと発表しあう場も必要だと思う。

7. ガールスカウト愛知県三河北地区

活動を続けていく事で、自分達が力をつけていくことができ、大きな成果につながる。また、その成果を多くの人に発表する機会を持つことができて、もっと多くの人を巻き込んでいくサイクルができ、さらに活動が広がっていくと思う。

8. ラムサールセンター

活動に複数回参加することもづくり。国際会議での発表など様々な経験を積むことでリーダーシップを養える。継続することで学ぶことも増える。これらの経験が社会に出た時に、どんな立場でも持続可能な社会づくりに貢献する活動につながる。

9. 中部大学

問題を自覚すること。社会を持続不可能にする要素の自覚が重要。ネガティブな話題も避けずに、正面から取り組む覚悟は重要だ。

10. 岡山市京山地区ESD推進協議会

今日発表があった活動の共通事項は「活動を継続している」ということ。これは簡単ではないが大切なことだ。継続することで新しい展望が開け、新しい活動ができるようになる。

11. 奈良教育大学ユネスコクラブ

学内、国内、国外でつながりを広げていく必要があり、課題だと思っている。これを実現することで自分たちが教員になった時に子供たちにもつなげていけると思う。

クロージング・パネル

■円卓会議総括

浅井 孝司　岡山市ESD世界会議推進局長

ESDの「E」は「EDUCATION・教育」の「E」である。これは狭い意味での教育ではなく幅広い意味に捉えられる。各自治体もESDは教育なので教育委員会の所管という対応ではなかなか広がらない。自治体セッションに参加した自治体ではこの幅広い意味を理解している。教育委員会の果たす役割は大きいが、教育委員会だけの問題ではなく、市、町全体でESDを考えるべきである。住民に対してESDは分かりにくいことが一番大きな問題である。「ESDって何？」という質問は必ず出るが、ESDは一言では言えない。それはテーマが非常に大きく、色々なものが関わっているからである。行政についていえば市・町全体で行っていくものであるので、首長の役割は非常に大きい。首長のリーダーシップがあるところはESDが市・町全体に広がっていく。広げるときに言葉の問題があり、ESDをそのままストレートに言っても広がっていかないが、それぞれに分かりやすい説明を心掛けるなど工夫している。

川廷 昌弘　CEPAジャパン代表／博報堂広報室CSRグループ部長

地域が抱える課題は企業にとってもそれは「テーマ」となるはずである。地域の方と連携する中で、共通のテーマを議論することが欠かせないと思う。企業にとってそのテーマに取り組むことが地域で持続可能に経営するための多くの対策など、安定した雇用を産む可能性があるのかを含めて議論していくことになると思っている。関わるセクターが自治体か教育機関かNGOかいずれであっても、企業と共有できるポイント、共有価値の創出（CSV）を期待するなど、地域からアプローチしていくことも必要だと思う。企業はもちろん地域の立場を考えて取り組まなければならない。企業と一言で言っているが、企業は組織であり、規模の大きさもある。現場が決裁権のある役員などに話しが通せるように地域の方に協力してもらうなど、一つ一つ丁寧な話合いが大事であると考える。

村上 千里　特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）理事・事務局長

NGOとして各分野でESD的な学びを切り拓いてきた方々にお話しいただいた。共通点は「学びの質」へのこだわり。科学的な知識・専門知などを社会の課題や私たちの暮らしと関連させて学ぶこと、さまざまな視点からクリティカルに問い直す力をつけること、社会の課題をみつけ自分事とし行動につなげていくなど、参加の質を高めていくことがESDには重要である。そして形式的な参加にとどまらない、参加者主体の学びの場をつくるためには「学び方を変える」ことが必要であり、教員も、NGOも、ファシリテーターとしての力量形成、レベルアップが重要であることが指摘された。さらに、学校や地域社会でさまざまな方が学び合う場を生み出していく「地域のESDのプラットフォーム」がしっかり機能していくためには、コーディネーターの存在が重要であることが指摘された。そして、ファシリテーターもコーディネーターも専門的な技術や経験が必要であり、収入を伴う仕事として確立していくことが重要である。

■ESDの主流化に向けて

岩本 渉　文部科学省参与／千葉大学エグゼクティブ・アドバイザー

現行のミレニアム開発目標の中には、初等教育の完全普及、初等中等教育におけるジェンダーの平等が書かれている。しかし最大の問題は初等教育の完全普及ですら若干しか改善が見られておらず、それも当然次の開発目標の宿題となる。一方、子ども達が初等教育にいく、初等教育からドロップアウトしないためにもいかに質のいい教育を提供しなくてはいけないか、そこにこそ教育の質の裏打ちをするものとしてESDがあると捉えたい。その意味で、Post MDGs, Post Dakarの中でしっかりESDを位置づける必要がある。ESDは運動論の側面と教育論の側面がある。ESDの内容については次第に研究が進んできたが、教育論としての深化を図る必要がある。他方、ESDの特色はインタージェネレーショナルという意味での時間軸、地理的な意味での空間軸を超えて共生につながるという事である。SDの実現する場は地域なのだから、そこに若者、企業も取り込んだ多様なステークホルダーからなるネットワークを作り、全国的にも重層的なネットワークを構築しESDをどう展開するかの検討が不可欠である。

鈴木 義光　環境省　総合環境政策局 環境教育推進室長

「知識や経験の活用と共有」が大事だが、知識や経験はあまり難しく考えず、自分がどう感じ、どう考え、どう学んでいくかではないか。人は教え教えられ、お互いがお互いを磨いていくという気がする。知ったこと、経験したことは情報と同じである。自分だけが持っていては意味がなく、人に伝えることで初めて情報は生きてくる。次の世代にどうつないでいくか、言葉は簡単だが、やることは非常に難しい。自分の子、他人の子、大人が子どもの目線・高さに立ち、自分が子どものときに経験したことをどう伝えていくのかが非常に重要なことである。今の環境教育、ESDを言っても言葉自体が先行してしまい説明が難しく、なかなか浸透していかないのが現実。「情報の共有」や、それらを「つなぐ人の活用」などを含めて、これからESDをどうやって伝えていくか、情報の共有の仕方とともにそのつなぎ方がこれから重要になってくるだろう。

渡邊 綱男　国連大学サステイナビリティ高等研究所シニア・プログラム・コーディネーター

「現場の課題と向き合うことから共感を！新しい流れを！つなぐ！」というキーワードを考えた。それぞれの地域の現場で起きている課題に真正面から真剣に向き合い、地域の資源、引き継がれてきた知恵、思いを一つ一つ丁寧に見つめ直す作業が行われていて、その中で目指すべき将来の姿を皆で模索している。立場を超えた共感や、新しい流れはそういった過程から生み出されるのではないかと思う。2日間の会議を通じて、ESDの取り組みや教材等の情報の共有や利用に関わる仕組みづくり、コーディネーター（つなぐ人）が積極的に活躍できる場づくり、ESD実践に光をあて互いにほめる仕組みづくり、地球的課題を解決するための世界との学びあいと連携の推進、地域の多様な市民が参加する自治体イニシアチブの強化、という5つの提言案があったが、これらの一つ一つの取り組みが非常に大事だと思う。それぞれの現場で、新たな課題に真剣に取り組み、それを乗り越えることが大きな力に結びつく。この5つの提言を経て、相互につながりあい、相互に支え合う関係が生まれることで、社会を変えていく、すなわち世界を動かす力になるのではないか。

柴尾 智子　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）教育協力部　部長

「ESDの関係者が集える場」はリアルでもバーチャルでもとても必要である。ESDはなかなか課題が難しいし、理想と現実はどこの社会、職場、どの時代でもあり、エネルギーを費えないと枯渇するということがある。「若者」を参加させるのではなく、若者が中心で、彼らがうまくやれることがもっと沢山ある。そのことに恐れをなさないで、任せるとどうなるんだろうという心配より、やってみてもらう場を沢山作っていくべきである。「Enabling Environment」があれば、リーダーシップを発揮できる、やる気が発揮できる仕組みがある豊かな土壌が少しずつ生まれているが、もっともっと大きく育っていくだろう。「国もがんばれ！」いっぱい研修があり、色々な機会、仕組みもあるが、既存の仕組みを活用してESDという旗が埋没していかないように工夫していただきたい。予算、政策も大切だし、国外への働きかけも大切である。日本政府として提案したことなので、そのことに対する責任もある。今後も海外へのインパクト、ODAの面でも政策の意味でも、国際的援助協力の意味でも引き続き、日本のリーダーシップを発揮してもらいたいと思う。

廣野 良吉　成蹊大学名誉教授／元国連経済社会理事会開発政策委員会議長 ESD-J顧問／「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事

ESDの推進主体は重要だが、本当に必要なのは誰のため、何のためにやっているのかである。ESDの受益者は各地域に住んでいる一人一人の住民である。住民の命、暮らしを守ることを真剣に考えることがESDの根幹ではないかと考える。地域の住民の命と暮らしを守っていくのは、当該地域の地方自治体であり、住民が最も関心を持っている課題についてESDを通じて解決することが急務である。現在のグローバリゼーションの世界では、失業、貧困、人権、家庭内暴力、差別、環境悪化、感染症等が、途上国だけでなく先進国においても大きな課題となっている。さらに先進国や一部の途上国では、少子高齢化や限界村落が急速に進行しており、これらの解決にESDは役立たなくてはならない。そのためにはどうしたらいいのか。ESDの「E」はEducationというよりもEmpowermentであり、SDを推進するのは単に教育・学習だけではなく、政策形成、政策実行のための法制化・制度化・人材育成とそのための予算化である。今後は、Empowerment for SDというところに中心を置いていかなければいけないと考える。Empowerment for SDによって、私たちは国内外の地域社会が抱えている課題の解決に向けて文部科学省のみならず、各省が一体となって取り組むとともに、これらの活動を通じて国際的な連携を強化することにもなる。私は、我が国の社会をより開かれたものにすること、そのためにグローバルな視点を持った人材の育成を推進し、国際連携を強化することが、今後のESDの目指すべき道ではないかと思う。自分たちで直面する課題を発見し、その解決の道を考え、そのための行動計画を皆で一緒に作成し、実行していくことが急務である。そのためには全国的なプラットフォームが重要である。地域の仕組みをうまく支え、それに対して連携をもっと強化するような努力を国内的、国際的にやってほしい。

■閉会の辞

前川 喜平　文部科学審議官

本日発表された若者たちはESDの本質をよく理解して活動しているわけですが、ESDは一般の方々にあまり浸透していません。私はこの7月まで初等中等教育局長を務めており、もっとESDが広がるよう努めてきましたが、実際、学校にもESDは十分に浸透していないと思います。例えば環境教育、人権教育、平和教育、国際理解教育は皆が知っています。それらをつなげていくと全てESDになる、という様に噛み砕いて話せば理解も深まりますし、また、その概念が児童生徒の主体性を大事にすることにつながる、ということは外してはいけないと思っています。「国連ESDの10年」の最終年としてこの秋に岡山市、愛知県名古屋市で「ＥＳＤユネスコ世界会議」が開催されることにより、特に学校教育、社会教育に関わっている方々の意識が強まること期待しています。また、本日の会議には企業の方々も参加されていますが、CSRやCSVはESDにつながるところがあります。企業は利益を生み出すことと shared value をどのように両立させていくのかが非常に難しい。おそらく shared value を生み出すための競争力が必要になってきます。現政権が重要視している課題の中に「グローバル人材の育成」があり、そのために、今年度からスーパーグローバル大学・高校の指定なども推進しています。しかし、「世界で勝つための競争力」ばかりを強調するのは非常に問題です。やはり地球社会で共生できる人間でなければいけない。だからこそ私はグローバル人材の話をする際には必ずESDを引き合いに出し「競争力の話だけではない」ということを伝えています。今回は様々なステークホルダーの方々が集まり、この2日間非常に刺激ある討議がなされました。ここでできたつながりは非常に大事であり、この会場におられる方々がまた核となって、次の10年、20年に向けて一緒に頑張っていきましょう。